

修士論文（要旨）

2016年1月

介護老人保健施設における利用者家族の看取りの体験プロセス

指導 長田 久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

214J6010

松下 幸子

Master's Thesis(abstract)

January 2016

Experiences of Families at the Deathbed of a Family Member in
Geriatric Health Services Facilities

Yukiko Matsushita

214J6010

Master's Program in Gerontology

Graduate School of Gerontology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Hisao Osada

目次

I.	はじめに	
1.	1) 高齢者の終末期の特徴	1
	2) 多死社会における看取り場所の確保の問題	1
	3) 介護老人保健施設と特別養護老人ホームの機能・役割	1
	4) 看取りの場としての介護老人保健施設	2
2.	先行研究	2
	1) 介護施設の看取りに関する先行研究	2
	2) 看取りを経験した家族に関する先行研究	3
	3) 先行研究の到達点と課題	3
II.	研究目的と意義	4
III.	用語の定義	5
IV.	研究方法	6
1.	研究対象者	6
2.	調査方法	6
3.	分析方法	6
	1) 分析方法の選択	6
	2) 分析テーマと分析焦点者の設定	7
	3) 分析の手順	7
	4) 妥当性	7
4.	倫理的配慮	7
V.	結果	8
1.	生成された概念、サブカテゴリー、カテゴリー	8
2.	ストーリーライン	8
3.	概念、サブカテゴリー、カテゴリーの詳細	9
	1) 《施設を信頼する》	9
	2) 《老健での看取りを選択》	12
	3) 《能動的に関わる》	14
	4) 《看取った満足感》	16
VI.	考察	18
1.	老健における医療提供の特性と家族の評価	18
2.	家族が職員とともに作り上げる老健での終末期医療およびケア	19
3.	終末期であることの受け入れと老健での看取りを選択するまでの過程	19
4.	看取った満足感が得られた要因	20
5.	本研究の限界と今後の課題	20
VII.	結論	21
	謝辞	
	文献	
	資料 (図表・分析ワークシート)	

I. はじめに

高齢者は、複数の疾患や障害を合併していることが多く、症状の出現の仕方も非定型的でありその終末期のプロセスはきわめて多様である。日本の将来推計人口によると、高齢者人口の上昇および死亡者数の増加が推計され、刻々と多死社会が近づいてきていることを示している。2040年には、病院でも自宅でも施設でも死ぬことができない「看取り難民」が49万人にまで急増する見込みであり、看取り場所の確保が急務となっている。よって、終末期ケアの場や看取りの受け皿としての介護施設の役割の拡大が期待されている。介護老人保健施設（以下、老健とする）は在宅復帰のための中間施設として位置づけられているが、高齢化の進行に伴い、介護ニーズが多様化してきている近年、老健における看取り件数は増加してきており、その実績はさらに増加していくことが見込まれている。老健における看取りに関する先行研究において、いずれも他の介護施設（特養など）の看取りに関する先行研究と同様、家族は、生活の場における看取りについて総合的に満足していたことが明らかにされているが、実際に老健施設で提供された終末期医療の具体的な実践内容に対して、どのように感じているかについては明らかにされていない。

II. 研究目的と意義

本研究の目的は、医療提供施設としての老健の機能を前提ととらえたうえで、老健で終末期を迎えた利用者家族を対象として、老健における終末期医療についてどのように感じているのか、そのプロセスも含めて明らかにすることである。本研究の意義は以下の2点にある。第1に、老健で終末期医療・ケアに関わるスタッフへの実践における課題を整理することである。第2に、高齢者の終末期の医療およびケアの対象に含まれる家族に対して、より具体的な支援内容を見いだすことである。

III. 研究方法

老健入所中に全身状態が悪化し、その施設で終末期医療を受けて看取りを行った高齢者の家族で、看取り後2ヶ月を経過している人を対象とした。同意が得られた対象者に対して、研究担当者が半構成的面接を行った。面接内容は逐語録化し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAとする）を用いて分析を行った。本研究における倫理的配慮については、桜美林大学研究倫理委員会の研究倫理審査を受け、承認を得た。

IV. 結果

4つのカテゴリー、9つのサブカテゴリー、19の概念が生成された。《 》はカテゴリー、【 】はサブカテゴリー、[]は概念を示す。

老健で終末期医療を受けた利用者家族の看取りの体験プロセスに関するカテゴリーとして、《施設を信頼する》、《老健での看取りを選択》、《能動的に関わる》、《看取った満足感》の4つが生成された。

家族は、【職員に対する理解】を深め、【施設医師がいて安心】であると感じ、【施設の医療に対する評価】を行った上で、【いつかは訪れる】と感じていた高齢者の死が近づいているという【現状を受容】し、《老健での看取りを選択》していた。そして、【老健における終末期医療のイメージ化】を図り、施設【職員とともに作り上げる】看取りを経験したことが、《看取った満足感》とつながっていた。

V. 考察

家族は、老健で提供される医療ケアに対する肯定的な評価を行い、《施設を信頼する》プロセスを経て、[ここで看取ってもらいたい] という思いに至っていた。特に医師に対しての揺るぎない信頼感が大きな安心感へとつながっていた。生活施設でありながら [常に医療専門職がいる] 環境で、症状の出現や悪化を防ぎ、利用者の生活の質が維持され、結果、[本人の状態が安定している] という実感が得られ、【施設の医療に対する評価】へとつながっていた。施設における医療体制やその提供内容は、終末期に限定されず、維持期においても関連する非常に重要な要素であり、通常の医療提供のあり方の検討を前提とした上で、その延長上として終末期医療について考えていくことの必要性が示唆された。

《老健での看取りを選択》した家族は、[経験したことのない老健の看取りに対する不安]を抱きながら、医療的な制約のある施設において、[できること、できないことを明確化]し、【老健における終末期医療のイメージ化】を図っていた。そして、《施設を信頼》していることを基盤として、施設での看取りへの理解を深めていたことがわかった。家族との十分な話し合いの下に、患者自身の意思を可能な限り推定し、それを尊重した上で、それぞれが対象に適した [医療処置内容を選択] することができていたことが分かった。

病院とは異なる生活施設という場で、時間をかけて信頼関係を構築した医師とのコミュニケーションが密にされる環境の中で、職員が家族の思いに寄り添い、[大切な時間を共有]し、家族が【職員とともに作り上げる】看取りの体験をしたことで、家族が [老健であそこまでしてくれた] という思いに至っていた。家族は、良好な関係である実親との親子の絆を実感し、自分たちが [家族としてできることをしてあげられた] と感じており、そのことが、施設で《看取った満足感》を得ることにつながっていたことが示唆された。

本研究の対象は、医療体制が整備されている状況のもと、看取りに積極的に取り組んでいる施設において、超高齢者の実親を老衰で看取った家族に限定されたものであった。そのため、今回、明らかになったのは、看取りが可能な要件を十分に満たしている老健において、家族が看取りに満足を得るまでのプロセスであり、一般化することには慎重を要する必要がある。今後は、対象施設を拡大し、施設内の医療体制や看取りに対する受け止めが異なる事例や、不満足を感じていた家族という対極事例も含めた分析をしていく必要がある。

VI. 結論

本調査において、老健での看取りに満足した家族に共通する要件として、信頼できる医師を中心とした施設での医療に対する肯定的な評価がされていたこと、超高齢の実親を老衰で看取っていたこと、家族間の関係が良好であったことが挙げられた。老健の看取りにおいては、本研究のような条件が整えば、家族の満足感が得られるということが示唆された。

文献

- 1) Lynn J, Adamson DM (2003) : Living well at the end of life. WP-137 Rand Corporation.
- 2) 池上直己 (2010) : 特集(諸外国における高齢者への終末期ケアの現状と課題)の趣旨. 海外社会保障研究, 168 : 2-3.
- 3) 日本老年医学学会(2012) : 「高齢者の終末期の医療およびケア」に関する日本老年医学学会の「立場表明」, 2015年6月21日
<http://www.jpn-geriat-soc.or.jp/tachiba/jps-tachiba2012.pdf>.
- 4) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」, 2015年6月21日, <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/newest04/gh2401.pdf>.
- 5) 厚生労働省(2015) 「人口動態統計年報 死亡の場別別み死亡数・構成割合の年次推移」, 2015年6月21日,
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/deth5.html>.
- 6) 厚生労働省 中央社会保険医療協議会(2015) : 「わが国の医療についての基本資料」,
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001bu83-att/2r9852000001bval.pdf>.
- 7) 厚生労働省 (2015) 「介護老人保健施設の人員、施設及び設備並びに運営に関する基準2015年1月16日」,
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H11/H11F03601000040.html>.
- 8) 厚生労働省(2015) 「介護老人保健施設の在宅復帰支援に関する調査研究事業報告書」, 2015年6月23日,
http://www.mhlw.go.jp/file/05-shingikai-12601000-Seisakutoutatsukan-Sanjikanshitsu_SShakaihoshoutanto/0000051896.pdf.
- 9) 厚生労働省(2015) 「特別養護老人ホームの設備及び運営に関する基準 2015年1月16日」, <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H11/H11F03601000046.html>.
- 10) 厚生労働省(2015) 「平成25年度介護サービス施設・事業所調査の概況」, 2015年6月23日, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/service13/index.html>.
- 11) 全国老人保健施設協会(2015) 「介護老人保健施設が持つ多機能の一環としての看取りのあり方に関する調査研究事業報告」,
2015年6月23日, <http://www.roken.or.jp/wp/wp-content/uploads/2012/07/3e7f98e5ec0c763ac53e011cb8a8ea76.pdp>.
- 12) 小林尚司 (2012) : 介護保険施設における高齢者の看取りに関する文献検討. 日本赤十字豊田看護大学紀要, **7(1)**, 65-75.
- 13) 丸山純子 (2011) : 介護保険施設の看取りに対する看護職者の関わりと課題～過去13年間の文献レビューから～. インターナショナル Nursing Care Research, **12(4)**, 25-135.
- 14) 小山千加代, 水野敏子 (2010) : 特別養護老人ホームにおける看取りの実態と課題に対する文献検討. 老年看護学, **14(1)**, 59-64.
- 15) 日本看護協会 (2008) : 介護保険施設における看護実態調査 2015年6月23日, <http://www.nurse.or.jp/home/publication/seisaku/pdf/79>.
- 16) 秋元照子, 川又恵美子 (2010) : 介護老人保健施設で実施する看取り介護の取り組みと成果 家族へのインタビューを通して,
癌と化学療法, **37(II)**, 195-197.
- 17) 清水みどり (2005) : 介護老人保健施設での死の看取りを可能にする要因の考察. 新潟青陵大学紀要, **5**, 347-358.
- 18) 日本老年医学学会(2012) : 「高齢者に対する適切な医療提供の指針」, 2015年6月23日,
http://www.jpn-geriat-soc.or.jp/proposal/pdf/geriatric_care_GL.pdf#search=高齢者に対する適切な.
- 19) 加瀬田暢子, 山田美幸, 岩本テロヨ (2005) : 特別養護老人ホームでのターミナルケアに携わる看護職者の悩み 全国調査における自由記述の分析. 南九州看護研究誌, **3(1)**, 11-21.
- 20) 流石ゆり子, 牛田貴子, 亀山直子, 他 (2006) : 高齢者の終末期ケアの現状と課題 介護保険施設に勤務する看護職への調査から. 老年看護学, **11(1)**, 70-78.
- 21) 串田美代志 (2008) : 波乱万丈の人生を生き抜いたAさんの最期のときは安らかに 認知症高齢者のターミナルケアに取り組んで. 認知症ケア事例ジャーナル, **1(2)**, 197-203.
- 22) 河本久美子, 井上訓見, 猪子弘美 (2005) : 介護老人保健施設における看取りへの取り組み 自然な看取りを考える. 日本看護学会論文集 老年看護, **35**, 158-160.
- 23) 千田睦美, 石川みち子, 吉田千鶴子 (2003) : 岩手県におけるグループホームのターミナルケアの現状. 岩手県立大学看護学部紀要, **5**, 57-64.
- 24) 池上直己, 池崎登江 (2013) : 遺族による終末期ケアの評価 病院と特別養護老人ホームの比較. 日本医療・病院管理学会誌, **50(2)**, 127-136.
- 25) 那須佳津美, 深堀浩樹 (2014) : 特別養護老人ホームで入居者を看取った家族介護者の経験. 老年看護学, **19(1)**, 34-42.
- 26) 原敦子, 小野幸子, 坂田直美, 他 (2003) : 介護老人保健施設における死の看取りを含むターミナルケアへの組織的取り組み 2施設の看護管理者の面接調査より. 老年看護学, **8(1)**, 86-94.
- 27) 山下科子, 小本曾加奈子 (2010) : 介護老人保健施設入所者の介護に対する家族の現状と求められる役割について 介護老人保健施設に勤務する看護職者の視点から. 日本看護学会論文集 地域看護, **40**, 154-156.
- 28) 平松万由子, 大淵律子 (2011) : 介護老人保健施設における終末期ケアに関する実態調査 看護職・介護職の認識に焦点をあてて. 三重看護学誌, **13**, 147-154.
- 29) 千葉真由美, 渡辺みどり, 細田江美, 他 (2010) : 介護老人福祉施設での終末期における対応方針と施設の体制 終末期ケアの取り組みの有無による比較. 日本看護福祉学会誌, **15(2)**, 163-175.
- 30) 二神真理子, 渡辺みどり, 千葉真由美 (2010) : 施設入所認知症高齢者の家族が事前意思代理決定をするうえで生じる困難と対処のプロセス. 老年看護学, **14(1)**, 25-33.
- 31) 原祥子, 小野光美, 大畑政子, 他 (2010) : 介護老人保健施設におけるケアスタッフの看取りへのこだわりと揺らぎ. 日本看護研究学会雑誌, **33(1)**, 141-149.
- 32) 須田啓一, 木村敬太, 瀬原文香 (2003) : 介護施設におけるターミナルケア 家族の意識調査と追跡調査. ターミナルケア, **13(3)**, 240-244.
- 33) 小野光美 (2007) : 介護老人保健施設における看取りの意味 家族の視点から. 神戸市看護大学紀要, **10**, 78.
- 34) 梅津美香, 小野幸子 (2002) : 老人保健施設の看護職者の施設内死亡に対する意識. 老年看護学, **7(1)**, 119-127.
- 35) 織井優貴子 (2006) : 都市部介護老人保健施設における終末期ケアについての意識調査 看護職と介護職の比較. 老年看護学, **10(2)**, 85-91.
- 36) 山田ゆかり, 池上直己 (2006) : 終末期ケアに対する遺族満足度-2つの病院における試行調査. 病院, **65(2)**, 132-135.
- 37) 長畑多代, 松田千登勢, 山内加寿, 他 (2012) : 生活の場である特別養護老人ホームでの看取りを支える看護実践の内容. 老年看護学, **16(2)**, 72-79.
- 38) 木下康人(2007) : ライブ講義M-GTA-実践的質的研究法; 修正版グランテッド・セオリー・アプローチのすべて. 初版1刷, 弘文堂, 東京.
- 39) 木下康人 (2006) : グランテッド・セオリー・アプローチの実践; 質的研究への誘い. 初版4刷, 弘文堂, 東京.